おきなわ社 発行

おきなわ

【復刻版】 全6巻・別冊1
1950年4月～1955年9月

体　裁　A5判・上製・総2,538頁
解　説　仲程昌徳・松下博文・
　　粟国恭子・酒井直子
総目次　新城栄徳
推　薦　我部政男・高橋敏夫
刊　行　2015年1月
揃定価　本体96,000円＋税

不二出版

沖縄の自己決定権が民衆の中から明らかになって来た今、1950年代前半に東京・おきなわ社から刊行された総合雑誌を復刻。対日講和条約のもとで在日の沖縄知識人たちが沖縄再建の祈りを込めた誌面が、外交・政治・産業、民俗・芸術・文学・文化人類学の研究に資する。――不二出版

【復刻版】おきなわ 全6巻・別冊1

●発　行――おきなわ社　●体　裁――A5判・上製・総2、538頁
●揃定価――本体96、000円＋税　ISBN978-4-8350-7669-0
●別　冊――解説・総目次・索引
＊別冊のみ分売可＝本体1、500円＋税
ISBN978-4-8350-7677-5

●解　説――仲程昌徳（琉球大学元教員）
松下博文（筑紫女学園大学教授）
粟国恭子（沖縄国際大学非常勤講師）
酒井直子（本誌編集人＝神村朝堅 長女）

●総目次――新城栄徳（「琉文21」主宰　URL：ryubun21.net）

●推　薦――我部政男（日本政治史、山梨学院大学名誉教授）
高橋敏夫（文芸評論家・早稲田大学文学部教授）

●刊　行――2015年1月刊行

●復刻版全6巻収録内容

復刻版巻数	原本巻号数	原本の発行年月
第1巻	第1巻第1号～第7号（通巻第1号～第7号）	1950年4月～11月
第2巻	第2巻第1号～第7号（通巻第8号～第14号）	1951年1月～10月
第3巻	第2巻第8号～第3巻第4号（通巻第15号～第20号）	1951年11月～1952年7月
第4巻	第3巻第5号～第4巻第4号（通巻第21号～第28号）	1952年8月～1953年5月
第5巻	第4巻第5号～第5巻第3号（通巻第29号～第36号）	1953年6月～1954年4月
第6巻	第5巻第4号～第6巻第4号（通巻第37号～第46号）	1954年5月～1955年9月

●主要執筆者の紹介
仲原善忠・金城朝永・比嘉春潮・奥里将建・東恩納寛惇・宮良当壮・島袋盛敏・伊江朝助・島袋源七

●特集号の紹介
通巻第九号「芸能特集」
通巻第一〇号「ハワイ特集」
通巻第一三号「故人追憶特集」
通巻第一四号「婦人特集」
通巻第一五号「領土問題号」
通巻第一六号「故人追憶特集――第二集」
通巻第一七号「児童・生徒号」
通巻第一八号「沖縄現代史号」
通巻第二〇号「琉歌集」
通巻第二四号「民謡集」
通巻第二七号「島袋源七氏追悼号」
通巻第二八号「組踊名作集」
通巻第三二号「沖縄研究号」
通巻第四五号「金城朝永氏追悼特集」

通巻第1号（創刊号）

巻頭言

一九五〇年
この新しい年を迎へて、我々沖縄の者は、講和條約に対する希望の光を期待し、昨年までの宙ブラリンの氣持を一掃出來ると予想したのであつたが、近頃は又、國際情勢が微妙複雑に変化しつゝあるように見受けられる、夢の中の物の形の様に、形をなすが如くしてなさず手に取れるようで届かないのが講和條約であり、沖縄の帰属問題であらう、まことに、悲喜交々到るの態であるが、所謂『二つの世界』の醸出す空氣が決めることで

表示価格は、全て税別

不二出版
〒一一三―〇〇二三
東京都文京区向丘一―二―一二
TEL　〇三―三八一二―四四三三
FAX　〇三―三八一二―四四六四
振替　〇〇一六〇―二―九四〇八四

推薦文

孤高の音符と音色

我部政男（日本政治史、山梨学院大学名誉教授）

彷徨える琉球王国の末裔たちは、叙事詩としての神話、物語を伝承してきた。その言説が、琉球・沖縄人のアイデンティティの中核へと奥深く連なり、歴史のターニング・ポイントで大きく膨らみを見る。記憶や記録とは、概ねそのことを言うのであろう。琉球・沖縄史上の転換点は、大つかみに、明への朝貢、薩摩の侵攻、琉球処分、日米の沖縄戦争、日本復帰（返還）を揚げておきたい。さらに一つ加えるならば、関東大震災時の琉球王国文書の湮滅を挙げたい。明治政府が、いずれ中国との領土紛争の災いになるとの理由で強制的に没収した琉球王国の最大遺物である。歴史は記録として残るが、文書記録の消滅は、歴史に大きな悲劇的な空白を残す。

近代の沖縄知識人たちは、この不安定な空白を埋めるべく残された古記録に寄り添う。伊波普猷のおもろ研究、東恩納寛惇の歴代宝案研究はその潮流であろう。戦争によって中断していたこの流れに再び明かりを灯したのが、澎湃として起こる戦後の沖縄研究＝沖縄学である。戦争後の沖縄のアメリカ統治、東アジア冷戦の激化による軍事基地の強化、またしても戦争に巻き込まれるのか、明日がどうなるかもしれない不安の中で、過去に学び明日を夢みる知的営為が、在日の琉球・沖縄人によって嚆矢を告げる。その明確な兆しが、日本の独立と講和をもたらす１９５０年代に刊行される雑誌『おきなわ』である。故郷を離れ異郷での精神状況は、ジャーナリズムとアカデミズムの融合を図る手法で、米軍占領下の沖縄の過去、現在、未来の重層的な世界へと分析のメスを振るう。ここに名をとどめる民間学者・比嘉春潮、仲原善忠、金城朝永、島袋源七、宮良当壮等が論陣をはる。この航跡こそが、今に見る冷戦期在京の沖縄知識人のまさに戦後日本の現実に自己を写した表象である。編集者・神村朝堅の心意気とこのマイノリティの声が国民へ届くことは、それほど期待は出来ない。然しその雰囲気と精神の高揚の記録は、不思議と長く謡い続けられる。本書の復刻は、まさにその伝統の橋渡しであろうか。

推薦文

「小さい野心、大きなのぞみ」で、総合的＝創造的沖縄人を捉える

高橋敏夫（文芸評論家・早稲田大学文学部教授）

「小さい野心、大きなのぞみ」（創刊号「巻頭言」）を掲げ、小さな雑誌いっぱいに全沖縄人の願いを盛ろうと総合雑誌『おきなわ』が東京で創刊されたのは、一九五〇年四月である。

中華人民共和国の成立、朝鮮戦争勃発等に顕著な東アジア情勢の緊迫は、米軍政下の沖縄の地政学的な意義を昂進させた。「講和条約に対する希望の光を期待し、昨年までの宙ブラリンの気持ちを一掃出来ると予想した」（同「巻頭言」）のも束の間、対日講和条約（五一年九月調印）によって、沖縄は日本から切り離される。しかし、『おきなわ』の「希望」は絶望に席を譲りはしなかった。むしろこの事態を冷静に受けとめた在日沖縄文化人は主義を超え連帯、未来のより大きな希望実現へと、永く広く深く着実に進むのだ。

焦眉の帰属問題では、日本復帰の立場をとる。もちろん軍国主義日本へのノスタルジーゆえではない。平和と民主主義を掲げスタートを切ったはずの戦後日本への「復帰」である。国際化では先をゆく沖縄が「復帰」することで、未だに閉鎖的思考から抜けだせぬ日本が変わるのも求めていたにちがいない。

米軍の暴力的支配が際立つ「沖縄の民衆にとっての暗黒の時代」（中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』）に、豊饒な沖縄文化から来て、世界各地で今を生き、水平的関係実現の未来を切望する「総合的かつ創造的沖縄人」を日々の生活の息吹もろともに捉える。そんな総合雑誌『おきなわ』の粘り強くけっして諦めぬ試みが、日米共同の新「琉球処分」に抗して広範な人びとが新たな生き方と新たな政治を選択しようと躍動する今、復刻されるのはまことに喜ばしい。

内容見本

本誌既刊総目録

一号（創刊号）

講和会議と沖縄　東恩納寛惇
蔡温　宮良当壮
故郷点景　島袋盛敏
八重山のはなし　比屋根安定
首里を思う
わが父を語る
——開業になった事は、何と云つても父の生涯の画期的事件である。コーを当て、御評定所筆者に任ぜられて、それから何処まで立身出世できるものやら、敢治に少しも興味を感じないわたしには判らない。然し官途を志した父には痛恨は一種の致命傷であつたろう。否、父一個の栄達からでなく、執政三司官でなくとも、開業は空前の大革命として一般に考えられたに相違ない。明治四十年代に入つても、父が酒盃を手にして鬱を散ずるかの如くに、「開業ナタルム、チヤーナイガ」と吐き出すように呟いたのを、わたしは覚えている。——　船越義珍
回顧四年　七流老人
沖縄やまと口礼讃　石野径一郎
光を求めて　金井喜久子
詩「山ももの季節」　矢野克子
——「山ももをつむ芭蕉は　青竹の籠頭にゆれて　「山ももも」「山ももも」「山ももも」　かたえく紅に染め　蕾染郷の白き器に　もられ　「山ももも」　「山ももも」　ふるさとは遠きにありて　思い出のいまは外国。　「山ももも」「山ももも」「山ももも」
教職にあるふるさとの友へ　山川武正
春のことぶれ　豊見山昌一

二号

沖縄文化の源流と将来　仲原善忠
——現代に於て最も能率的な生産と新らしい型の文化を生みつつある米国と抱き合つている沖縄は、まさに、竹々から空手漫語　仲原善忠
沖縄やまと口礼讃　比嘉春潮
光を求めて　仲原善忠
詩「山ももの季節」　比嘉春潮
——「山ももをつむ芭蕉は　青竹の籠頭にゆれて　「山ももも」「山ももも」「山ももも」　かたえく紅に染め　蕾染郷の白き器に　もられ　「山ももも」　「山ももも」　ふるさとは遠きにありて　思い出のいまは外国。　「山ももも」「山ももも」「山ももも」
教職にあるふるさとの友へ　山川武正
春のことぶれ　豊見山昌一

安村つる先生　遠山静江

十七号（児童、生徒号）

沖縄の初等学校児童の皆さんへ　沢田朝序
偉い人とはどんな人を言うか　奥里将建
詩「東京の空」　矢野克子
教室手帖より　前原信明
当山久三氏と大城孝蔵氏　安次富松蔵
里子も楽し育ての親　金城芳子
詩「阿嘉島の子等」　吉田嘉七
開くだに涙は止まず　常ならばいくさ遊びに　うつくしき
幼なき子らは
小さき手にまこと火を噴く　手榴弾をしかとにぎりて　敵陣
に敵の戦車に　突撃し遂に散りしと
敵せめはつとに知りてむ　知りつゝも止むに止まれぬ　久米
の子の血を継ぐ子等は　みそつ幅も残りしならむ　その口に
万才と叫び　相つぎて舞れたりしか　阿嘉島の小さき子等も
童話「犬と猫」　島袋源七
童話「真の友」　見里朝慶
本土在住沖縄出身児童、生徒作文集

十八号（沖縄現代史）

沖縄現代史序説　金城朝永
沖縄現代政治史　仲原善忠
沖縄現代産業・経済史　仲原善忠
沖縄現代社会・風俗史　比嘉春潮
沖縄現代教育・文化史　島袋源七
沖縄現代資料及研究文献　金城朝永
沖縄歴史略年表　比嘉春潮

十九号

思いを郷土に馳せて——郷土再建と移民問題——　城間善吉
琉球拳法（空手）の完成者　松村宗棍先生　長嶺将真
躾けと沖縄の俚諺　見里朝慶
日本の体温に触れて　喜屋武真栄
外間現篤　東恩納寛惇
——私は外間のやうな類型の人物に未だ接した事がない。白井雪二の「富士に立つ影」に出て来る人物で、名は忘れたが、隣りの家まで行くにも、物々しく草鞋を穿き、長刀をダラリと下げて、剣道の達人と立ち向かつて相打ちの一手で無心に克つのがあつたが、あの辺の面目が外間と似てゐる。さう云へば、中学時代で、髪飾の仕合に、殊更大振の竹刀を執り、ダラリと右下に構へ、大声叱呼して、タチからも、ヨコからもナグリとばし、最も多く眼をねらふ、荷も流儀もあつ

情熱の愛国詩人——琉球の恩納ナビ物語——　伊波南哲

二十八号　組踊名作集（各篇概説・随想付）

銘刈子　執心鐘入（中城若松）　二童敵討（饒佐丸）
女物狂（人盗人）　孝行之巻　万才敵討（高平良）　義
臣物語（国吉の比屋）　大城崩　手水の縁（波平山戸）
大川敵討（村原、忠孝婦人）　花荒の縁（荻川の子）
伏山敵討　巡見官　姉妹敵討　忠臣身替の巻（八重瀬）
久志の若按司（天願の若按司）　概説＝比嘉春潮　随想
＝島袋盛敏

二十九号

沖縄の文学的考察　当間嗣光
波上の眼鏡ベツチルハイム　比屋根安定
琉球織物研究の種蔵田中俊雄　宮良当壮
君の業績　山之内一郎
弔辞　菅沼祐一
無類の善意・謙虚田中さんを悼む
——田中さんの謙虚な人柄で想い出されるのは、田中さんが口ぐせのように言つていたのであるが「この本（沖縄織物製地の研究）はねえ、僕が書いたには違いないが、本当は僕だけのものじやないんだよ。僕が沖縄へ行つたとき色々お世話になつた人達——はもちろん、直接、間接出版に協力してくれた人々、先輩、後輩、肉親など数人の人々の協力の賜か分らないんだ。殊に戦後残されたものといえば、ただ梶野原だけというみじめな沖縄の人々、沖縄文化に関心のうすい占領軍の下にある沖縄の人々のためにも、これを出版するは僕の義務だよ」という言葉である。あのケッの言えない田中さんはきつと心おのそう思つていたのに違いないのだ。戦火に痛めつけられた沖縄の人達に寄せる人類愛ともいうべき心情は全く切実で「沖縄織物製地の研究」の中にも至るところ、ひ見され、当時まだ米軍の占領下にあつたころとて、文中言葉遣いが少し強すぎはしないかと心配する向きもあり、書きかえたところもあるほどだつた。しかし沖縄の人々の上に覆いかぶさつている暗雲に対するレジスタンスは文中至るところで我々の心を激しく打つのである。——

沖縄が生んだ歌聖真の二大芸術家　森英男
渡久地政信と波平朕男
——元来日本の流行歌には日本各地の民謡が消化分析されて取り入れられてより、支那メロディや朝鮮メロディも既に開拓しつくされている。そればかりか南北米や遠い南洋方面のメロディまでがすでに開拓の鍬が入れてある。手近なところで、未開拓のメロディの沃土を求めるならば沖縄民謡の外にはない。沖縄民謡、沖縄メロディは非常に優れたものであるのに、これを消化して歌謡曲に織り込む企て に至つては誰一人もない。——

雨の夜の一日　宮原敏
短歌一月下美人——夜会草に寄せて沖縄を思ぶ　久木田みのる
東京の屋根の下泡盛は流れる　宮良当壮
〃沖縄〃繁昌之記　矢野克子
俳句「郷遠し」　山之口貘
シナリオ「沖縄健児隊」（上）　沢村勉

三十一号

「琉球語」という名称に就いて——附説・琉球の語原　金城朝永
詩「芸道に励むふるさとの乙女たちに光栄あれ」　矢野克子
がじまるの不藤　山之口貘
——ある夏のことでした。豚の耳のさしみを酒の肴にしながら の話でしたが、人間の眼、物を見るこの眼といふものが、指先にあるのであつたら、どんなにか重宝なものだらうといふのです。この話を持ち出したのは、非常に背のひくい友人でしたが、映画の立見をしても、おもふやうにはスクリーンを見ることの出来ない、さういふ不自由さから出て来た話で、若しもこの眼が、指先にあるのであつたら、どんなに混んでゐても、人の肩の間や背の間からでも、どんなにたのしく映画を見ることが出来るだらうといふのでした。ところが、そこに居合はせたもうひとりののんだくれの友人が、それぢや俺がこまると云つて、前にしてゐた盃を口に持つていきながら、これをやると眼がふみるぢやないかと、眼をしよぼつかせて見せたのです。——
王女奈美と瀬名波靈済　奥里将建
シナリオ「沖縄健児隊」（下）　沢村勉

三十二号（沖縄研究号）

琉球の歴史と文化　金城朝永
先史時代の沖縄　桜井清彦
民族文学としての「おもろさうし」のあらまし——その歴史的・社会的背景　内間貫友
琉球の芸能　志賀信夫
二つの歌——「沖縄戦場小唄」と「経戦日記」——　内間貫友
沖縄に関する文献——主として歴史地誌に就いて　金城朝永
世界におなじわ、ぬ樋かけてくゝやい
遠海ぬ言ぢりん感ちゃて知ゆさ　（前原亀子寄）

『おきなわ』第４巻第９号、通巻33号（1953年12月）

関連図書

沖縄文化協会 発行（一九六一年四月～一九八三年三月）

沖縄文化 全8巻

第一期の創刊は一九四八年一一月一日、創刊号に原稿を寄せたのは仲原善忠、宮良当壮、比嘉春潮、金城朝永。伊波普猷亡きあと沖縄研究の第一歩を印した雑誌である。第一期は一九五三年通巻第二七号で休刊、一九六一年に復刊し現在に至っている。今回の復刻は復刊第一号（一九六一年四月）から第六〇号（一九八三年三月）まで。

解説（波照間永吉）付き

B5判・A5判・上製・総4、608頁

推　薦＝我部政男・仲程昌徳

揃定価＝本体150、000円＋税

近代沖縄新聞集成 DVD版 全12枚・別冊5

本集成は、戦前に沖縄で発行され、半世紀に及ぶ調査によって県内外から掘り起こされた新聞を、沖縄・日本近代史の資料として提供する。

【内容】琉球新報（一九八八～一九一八年、一九三八～一九四〇年）、沖縄毎日新聞（一九〇九～一九一四年）、沖縄日報（一九三八～一九四〇年）、沖縄新聞、沖縄朝日新聞、沖縄タイムス、沖縄新報、その他

編　集＝『近代沖縄新聞集成 DVD版』刊行委員会（新崎盛暉ほか）

別　冊＝収録新聞発行年月日・号数一覧

検索システムインストールCD全4枚付き

推　薦＝有山輝雄・仲程昌徳・三木　健・宮城晴美

揃定価＝本体570、000円＋税

うるま新報社 刊（一九四五年七月～一九五一年九月刊）

うるま新報 全6巻

解説（新崎盛暉・丹野喜久子）付き

B4判・上製・総1、962頁

推　薦＝小川政亮・我部政男・福島鐳郎・宮城悦二郎

揃定価＝168、000円＋税

琉球新報社 刊（一九五一年九月～一九五六年一二月刊）

琉球新報 全27巻

解説（新崎盛暉）付き

B4判・上製・総9、548頁

推　薦＝我部政男・門奈直樹

揃定価＝本体756、000円＋税

沖縄新民報・自由沖縄 全2巻

『沖縄新民報』は、一九四六年一月、九州各地に疎開していた沖縄出身者のための情報紙として、親泊政博によって福岡で創刊。『自由沖縄』は、一九四五年一二月、沖縄人連盟の機関紙として、比嘉春潮を中心として、東京で創刊された。両紙は、沖縄が米軍占領下にあり、沖縄出身者の社会と完全に分断されている状況にあって、九州への疎開者や外地からの引揚あるいは占領下の日本を見なおす資料として復刻する。戦後日本の沖縄人社会を知る資料として、

解説（新崎盛暉）付き

B4判・上製・総642頁

推　薦＝我部政男

揃定価＝本体48、000円＋税

占領期・琉球諸島新聞集成 全16巻

沖縄現代史を解明するために『宮古民友新聞』、『みやこ新聞』、『南西新報』、『海南時報』、『奄美タイムス』の五紙を復刻刊行する。

監修（新崎盛暉）

解説（仲宗根将二・大田静男・弓削政巳）付き

A4判・上製・総6、140頁

揃定価＝本体448、000円＋税

沖縄県教育会／沖縄教育会 発行（一九〇六年～一九四四年刊）

沖縄教育 全38巻・別冊1

戦前期沖縄における教育会誌『沖縄教育』は、一九〇六年三月、『琉球教育』の後継誌として刊行された。沖縄における「大和化」政策など、近代沖縄における教育と文化の史実を解き明かす上で最も重要な資料である。

編　集＝『沖縄教育』復刻刊行委員会

別　冊＝解説（藤澤健一・近藤健一郎・梶村光郎・三島わかな）・総目次・索引

B4判・A5判・上製・総13、726頁

推　薦＝逸見勝亮・三木　健・屋嘉比収

揃定価＝本体555、000円＋税

琉球大学文芸部（琉大文芸クラブ）発行（一九五三年～一九七八年刊）

琉大文学 全5巻・付録1・別冊1

『琉大文学』は幾度にわたる休刊・停刊を挟み、第三四号まで刊行された。誌面では多くの同人がペンネームを使用していたが、それは米軍の強い取締りの中で名前を秘することが必要な時代であったからである。

別　冊＝解説（我部　聖）・総目次・索引

A5判・上製・総2、556頁

付　録＝『前衛地帯』『沖縄文学』『サチュリコン』（1巻2号）『原点』

推　薦＝小森陽一・新城郁夫・仲程昌徳・目取真俊

揃定価＝本体96、000円＋税

戦後初期沖縄解放運動資料集 DVD版 全1枚・別冊1

軍政下の弾圧を逃れ秘密裡に進められた「島ぐるみ闘争」の準備活動を、当時の合法・非合法の運動資料、関係者のインタビュー記録、官憲側の監視資料、関連記事・論文などにより総合的に明らかにした、画期的な歴史資料集。

編集・解説＝加藤哲郎・森宣雄・鳥山淳・国場幸太郎

別　冊＝『島ぐるみ闘争」はどう準備されたか―沖縄が目指す〈あま世〉への道』森宣雄・鳥山淳 編著（分売価＝1、800円＋税）

推　薦＝新崎盛暉・冨山一郎

揃定価＝30、000円＋税

琉球政府 発行（一九五四年版～一九七一年版）

琉球要覧 全14巻

B5判・A5判・上製・総7、350頁

推　薦＝原洋之介

揃定価＝本体272、000円＋税（各巻分売可）

琉球政府 発行（一九五五年版～一九七二年版）

琉球統計年鑑 全14巻

B5判・上製・総6、786頁

推　薦＝原洋之介

揃定価＝本体294、000円＋税（各巻分売可）

琉球列島米国民政府 発行（一九五七年～一九七〇年刊）

今日の琉球 全12巻・別冊1

巻頭解説（大城立裕）付き

別　冊＝解説（鳥山　淳）・総目次・索引

B5判・上製・総6、260頁

推　薦＝新崎盛暉・吉見俊哉

揃定価＝本体300、000円＋税

琉球諸島米国高等弁務官事務所 発行（一九五九年～一九七二年刊）

守礼の光 DVD版 全5枚・別冊1

別　冊＝解説（仲程昌徳）・総目次・索引

推　薦＝大田昌秀・我部政明

揃定価＝本体175、000円＋税

内容見本

沖縄文化の過去と將來

仲原善忠

沖縄の文化に特殊な色彩があるかどうかと問われても即座に返事することは出來ない。それは要するに程度の問題である。日本文化も奈良時代と室町時代とはその性格をことにし、同じ時代でも江戸と上方とはそれ〴〵の特長があり、又上方でも京都と大阪とは多少のちがいがある。

沖縄のことを考へる時、皆も亦吾々はあの小さな島々が一つの獨立國であつたために大げさに考へすぎはしないか、王國と云つても加賀の百萬石、島津八十萬石に對して十萬石足らずである。人口は二百年前わづか廿萬である。その廿萬人が多くの島に散居し、文化を生み生す基盤は極めて狹くその傳播普及も困難な狀況にあつた。

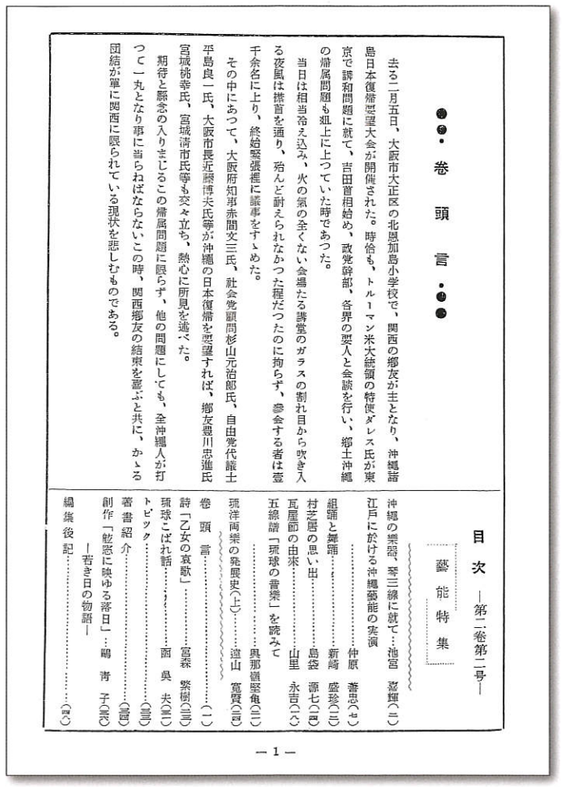
かように貧瘠な島で而かも外國との交通は不便であるにかゝわらず、歌謠・音樂・建築・工藝・儒學が相當に發達し、その或るものは一例へばカスリの如きは一日本の水準を遥かに突きぬけ、或る時代の文化を表象する石城は日本よりも百五十年も早く始まり、沖縄でその遺樂が止んだ時に日本ではこれが初まつている。現在の日本のカスリは世界で最もすぐれたものと云われているから、これで以て沖縄のカスリの位置がわかるわけである。日本は一面「木の文化」とも云われ建築・彫刻共に木造中心である。「石の城廓があくれたからとて別に不思議でもない。日本音樂の中心をなしている三味線は沖縄の三絃が入つて行つたものであることは記錄にも明らかであるが、沖縄へは南方から入つたものらしく、カスリも印度から南洋へ、それから沖縄に來てその性格を一變し潯酒奥雅なものとなつて日本に北上したと云われる。

所が日本から南にさがつたものは、又數限りなく見られる。要するに、文化の發達はその土地自體における段階的進展・停頓・崩かいと外部文化の刺戟・影響・攝取によつて消長するが、根本はその社會の基底をなす生産力の關係によつて規定されるものである。少しやゝつこしいことを云い過ぎたようだが、具體的の話をして見よう。

×

鍋鐸（ドウタク）という古代人の遺物がある。形は寺

▲第1巻第2号、通巻2号（1950年5月）



●●・巻頭言・●●

去る二月五日、大阪市大正区の北恩加島小学校で、関西の郷友が主となり、沖縄諸島日本復帰要望大会が開催された。時恰も、トルーマン米大統領の特使ダレス氏が東京で講和問題に就て、吉田首相始め、政党首部、各界の要人と会談を行い、郷土沖縄の帰属問題も俎上に上つていた時であつた。

当日は相当冷え込み、火の氣の全くない会場たる講堂のガラスの割れ目から吹き入る夜風は挑戦を通り、殆んど耐えられなかつた程だつたのに拘らず、參会する者は壹千余名に上り、終始緊張裡に議事をすゝめた。

その中にあつて、大阪府知事赤間文三氏、社会党顧問杉山元治郎氏、自由党代議士平島良一氏、大阪市長辰巳藤博夫氏等が沖縄の日本復帰を要望すれば、郷友喜川忠進氏宮城佛幸氏、宮城清市氏等も交々立ち、熱心に所見を述べた。

期待と懸念の入りまじるこの帰属問題に限らず、他の問題にしても、全沖縄人が打つて一丸となり事にあらねばならないこの時、関西郷友の結束を喜ぶと共に、かゝる団結が最に関西に限られている現状を悲しむものである。

目次 ―第二巻第二号―

藝能特集

沖縄の樂器、琴三線に就て…池宮　喜輝（三）

江戸に於ける沖縄藝能の実演……仲原　善忠（六）

組踊と舞踊……新崎　盛珍（三）

村芝居の思い出……島袋　源七（三）

瓦屋節の由来……山里　永吉（六）

五線譜「琉球の音樂」を読みて……具那覇盛丸（三）

琉洋両樂の発展史（上）……迎山　寛賢（三）

巻頭言……（一）

詩「乙女の哀歌」……宮森　繁樹（三）

琉球こぼれ話……面　真　夫（三）

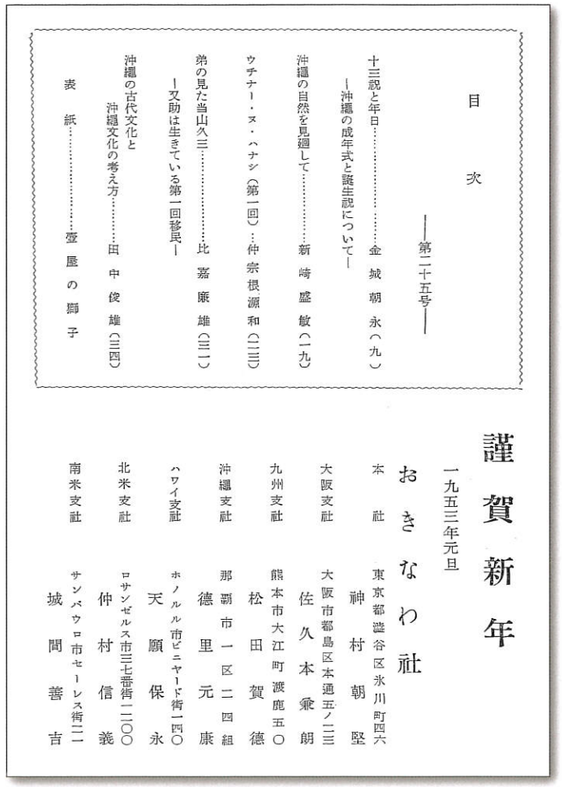
トピック……（三）

著書紹介……（三）

創作「飢恐に映ゆる落日」……鵜　青　子（三）

編集後記……（六）

▲第2巻第2号、通巻9号（1951年2月）



謹賀新年

一九五三年元旦

おきなわ社

本　社　東京都渋谷区氷川町四六　神村　朝堅

大阪支社　大阪市都島区本通五ノ二三　佐久本兼朗

九州支社　熊本市大江町渡鹿五〇　松田　賀徳

沖縄支社　那覇市一区二四組　徳里　元康

ハワイ支社　ホノルル市ビニヤード街一四〇　天願　保永

北米支社　ロサンゼルス市三七番街二二〇〇　仲村　信義

南米支社　サンパウロ市セーレス街二一　城間　善吉

目次 ―第二十五号―

十三説と年日……金城朝永（九）

―沖縄の成年式と誕生説について―

沖縄の自然を見廻して……新崎盛敏（一九）

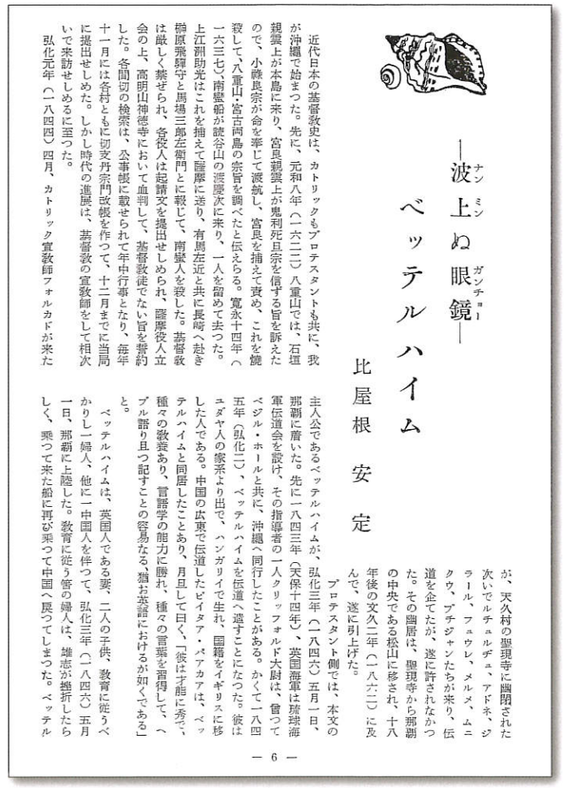
ウチナー・ヌ・ハナシ（第一回）…仲宗根源和（二三）

弟の見た当山久三……比嘉康雄（三二）

―又助は生きている第一回委員―

沖縄の古代文化と沖縄文化の考え方……田中俊雄（三四）

表紙……壺屋の獅子



―波上ぬ眼鏡（ナンミンガンチャー）―

ベッテルハイム

比屋根安定

近代日本の基督教史は、カトリックもプロテスタントも共に、我が沖縄で始まつた。先に、元和八年（一六二二）八重山では、石垣親雲上が本島に来り、宮良親雲上が鬼利死且宗を信ずる旨を訴えたので、小森良宗が命を奉じて渡航し、宮良を捕えて責め、これを撲殺して、八重山・宮古両島の宗旨を調べたと伝えられる。寛永十四年（一六三七）、南蛮船が読谷山の渡慶次に来り、一人を留めて去つた。上江洲助光はこれを捕えて薩摩に送り、有馬左近と共に長崎へ赴き、横原飛騨守と馬場三郎左衛門とに殺じて、南蛮人を殺した。基督教は厳しく禁ぜられ、各役人は起請文を提出せしめられ、隠匿役人立会の上、高照山神徳寺において血判して、基督教でない旨を誓約した。各間切の検索は、公事帳に載せられて年中行事となり、毎年十一月には各村ともに切支丹宗門改帳を作つて、十二月までに当局に提出せしめた。しかし時代の進展は、基督教の宣教師をして相次いで来訪せしめるに至つた。

弘化元年（一八四四）四月、カトリック宣教師フォルカドが来たが、天久村の聖現寺に幽閉された次いでルチュルザュ、アドネ、ジラール、フュウレ、メルメ、ムニクウ、ブチジャンたちが来り、伝道を企てたが、遂に許されなかつた。その幽居は、聖現寺から那覇の中央である松山に移され、十八年後の文久二年（一八六二）に及んで、遂に引上げた。

プロテスタント側では、本文の主人公であるベッテルハイムが、弘化三年（一八四六）五月一日、那覇に着いた。先に一八四三年（天保十四年）、英国艦隊は琉球海軍伝道会を設け、その指導者の一人クリッフォルド大尉は、曾つてベジル・ホールと共に、沖縄へ同行したことがある。かくて一八四五年（弘化二）、ベッテルハイムを伝道へ遣すことになつた。彼はユダヤ人の家系より出で、ハンガリイで生れ、国籍をイギリスに移した人である。中国の広東で伝道したビイタア・パアカアは、ベッテルハイムと同居したことあり、月旦して曰く、「彼は才能に秀で、種々の教養あり、言語学の能力に勝れ、種々の言語を習得して、ヘブル語り且つ記すことの容易なる、猶太聖詩におけるが如くである」と。

ベッテルハイムは、英国人である妻、二人の子供、教育に従うべかりし一婦人、他に一中国人を伴つて、弘化三年（一八四六）五月一日、那覇に上陸した。教育に従う筈の婦人は、雄志が挫折したらしく、乗つて来た船に再び乗つて中国へ戻つてしまつた。ベッテル

▲第4巻第5号、通巻29号（1953年6月）

▲第4巻第1号、通巻25号（1953年1月）